



ふれあい



ふれあい看護体験より(P7)

【基本理念】

私たちは、医の倫理に高い視点において高度急性期医療に携わる誇りと責任をもち、患者、家族との相互理解を深めて県民に信頼される親切であたたかい病院をめざします。

- 目次 -

病院長あいさつ	院長：望月泉……2
がん化学療法科のご紹介	医長：福田耕二……3
放射線部のご紹介	……4
地域医療支援部の東日本大震災における 地域医療支援の状況	業務企画室主事：荒田綾子……5
おしらせ・編集後記	……7
連携室だより No.16	

【行動指針】

- 1 私たちは、十分な説明をおこない、良質で安全安心な医療をめざします。
- 2 私たちは、医学、医療の研鑽に励み、本県医療水準の向上につとめます。
- 3 私たちは、県内医療機関との機能分担・連携のもと、高度医療と救急医療を提供します。
- 4 私たちは、本県医療の確保のため、地域医療機関への診療支援に努めます。
- 5 私たちは、甚大な被害を及ぼす災害にも対応できる医療体制を整えます。
- 6 私たちは、臨床研修体制を充実させ、国民の期待する医師の養成につとめます。
- 7 私たちは、健全経営につとめ、効率的な病院運営をめざします。

※ 広報誌「ふれあい」は1,700部を作成し、県民、連携医療機関、行政機関等に岩手県立中央病院の情報をお届けしています。

院長あいさつ

院長 望月 泉



新緑の候、ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。さて私こと 4月1日付けをもちまして佐々木崇前院長の後任として、岩手県立中央病院院長を拝命いたしました。

岩手県立病院のセンター病院である当県立中央病院の舵取りを委ねられ、身の引き締まる思いがしております。私は昭和63年4月当院に赴任して以来、数多くの消化器外科、小児外科の手術に携わってきた外科医です。チーム医療の推進と患者中心の医療を目指してきました。

さて甚大な被害をもたらした東日本大震災津波から1年3か月が経過しました。命を失われたかたがたに心からのお悔やみを申し上げますとともに、被災され瓦礫の処理も遅々として進まず、仮設住宅での暮らしを余儀なくされているかたがたの一日も早い復興を心よりお祈りいたします。私たち中央病院医療チームも発災3日目の3月14日から、病院の救急車で陸前高田市に医療支援に行きました。被災した県立高田病院の職員は避難所で生活をしながら救護所を立ち上げ、水道も使えず、医薬品も不足する劣悪な環境のなか不眠不休で被災者の診療に従事していました。こうした医師や看護師たちの働きは、組織の命令によるものではなく、われわれ医療者には奉仕の精神と慈悲の心、良心的誠意が根本にあります。志を高く医療を支えているのはノブレス・オブリージュ（地位や身分に相応した重い責務・義務という意味の仏語）の精神です。花巻市出身の宮澤賢治は著書である『農民芸術概論綱要』で、世界が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。自利のためには利他の精神が大切と記しています。医療人プロフェッショナルリズムとしては患者の利益を最優先する利他主義、専門職としての質の向上、社会的責任が求められます。

当院のミッションは医の倫理をふまえ、高度急性期医療の推進と県民に信頼される親切であたたかい病院をめざすことです。高度医療、救急医療、地域医療支援、研修医教育、健全経営が五本柱です。職員一丸となりこの理念を達成できるよう努力する所存です。いまや地域医療連携計画に基づく地域包括型連携、地域性を踏まえた医療・介護・在宅支援機関同士のネットワーク作りが求められ、医療連携部門の役割が変化してきました。当院もニーズに答えるべく地域連携室の機能強化に取り組み始めました。とくにがん診療においては病診連携の成立にはまだしばらく時間を要すると考えられます。医療者側の都合で進めるのではなく、患者を中心とし、患者目線で無理強いすることなく十分な説明のもとに切れ目のない医療として進めていく必要があります。地域連携はまさに今日の医療そのものであると思います。今後も医療の質と経営の質のDouble Winnerを実現して、地域住民が必要とし、県民にとってなくてはならない岩手県立中央病院であり続けたいと願っています。今まで以上に先生方、地域の住民の皆様方のご理解、ご支援をお願いいたします。

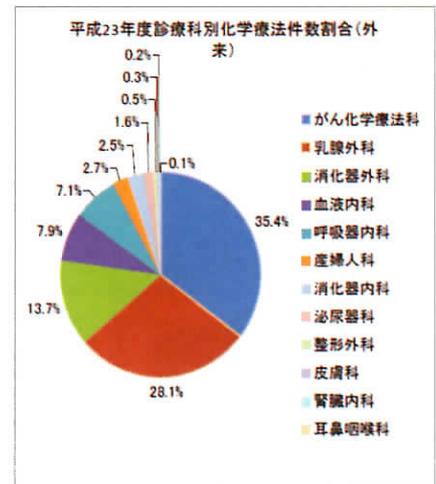
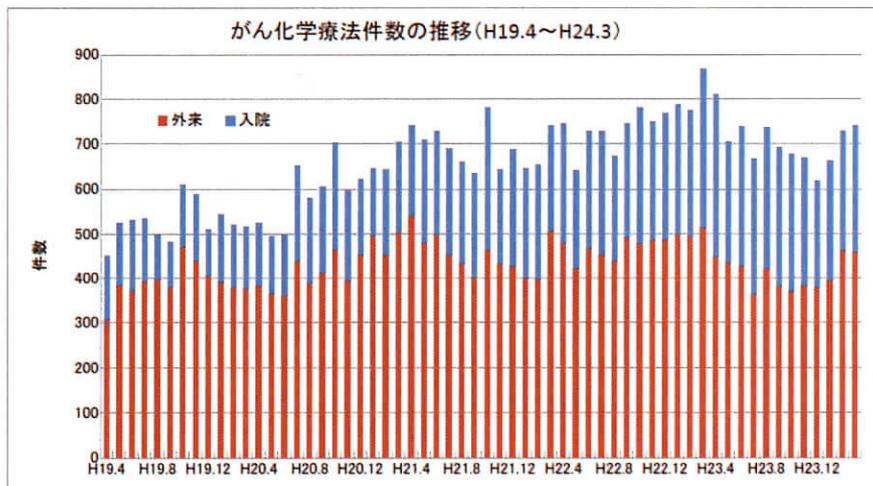
がん化学療法科のご紹介

がん化学療法科医長 福田 耕二

岩手県立中央病院の外来化学療法室は、2004年にベッド8床からスタートしました。その後、2006年4月にはがん化学療法科が開設され、ベッド数もがん患者さんの増加に伴って12床、18床へと徐々に拡大されました。そして、2010年10月の新外来棟の増築・移転を機に、ベッド26床とリクライニングチェア4床の計30床と、抗がん剤などの専用調整室を備えた外来化学療法室が新設されました。一人一人のスペースはパーティションで仕切られており、ある程度ゆったりと治療が受けられる広さが確保されています。



2011年度の外来化学療法の施行件数は4,937件で、ひと月あたりでは平均411.4件、1日あたりでは平均20.1件という状況にあり、1日40件近くになる場合もありました。外来化学療法室の利用が多い診療科は、がん化学療法科、乳腺外科、消化器外科などです。



また、外来化学療法室での前立腺がんや乳がんへのホルモン治療が加算対象になりましたので、こうしたホルモン剤の処方により、施行件数はさらに増加しています。

スタッフはがん薬物療法専門医、がん化学療法看護認定看護師、がん専門薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師、がん指導薬剤師と充実しており、外来化学療法室専任の看護師・薬剤師ならびにがん性疼痛看護認定看護師・がん看護専門看護師とともに、がん患者さんへのより質の高いチーム医療提供に努めています。がん治療におけるチーム医療には、エビデンスの高い医療提供だけでなく、患者さんの不安・悩みについての対応・支援が必要と考えます。そこでがん患者さんやそのご家族同士が気持ちを伝え合い、そこに医療スタッフが一緒に加わって話をする試みとして、2011年12月から“メディカル・カフェ”を毎月1回のペースで開催し始めました。まだ、スタートしたばかりですが、患者さんが患者さんを励ますという場面は大変印象的です。

中央放射線部 紹介

中央放射線部では

- 各種画像診断装置を用いた画像情報の提供
- 最先端の治療機器を用いた高度な放射線治療

を行っています。



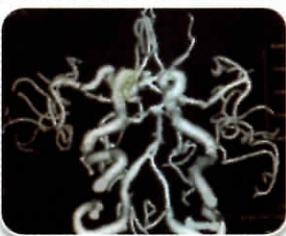
一般撮影検査

・X線を使い胸部や骨などの写真を撮影しています。



CT検査

・X線を使って、人体の断面写真を撮影する検査です。



画像処理

・近年では骨や血管の立体表示など、より分かりやすい画像を提供しています。



MRI検査

・磁場を用いた撮影検査で、ほかの検査と異なり被曝の心配がありません。



血管撮影

・カテーテルや薬剤を使って、血管の撮影や治療を行っています。



核医学検査

・放射性医薬品を投与して撮影を行う特殊な検査です。



放射線治療

・人体に高エネルギーの放射線を照射して、がんに対する治療を行っています。

上記検査・治療のほかにも24時間体制での救急対応など、患者さまを第一に考えた質の高い医療の提供に努めています。

地域医療支援部の東日本大震災における地域医療支援の状況

業務企画室主事 吉田綾子

平成 23 年 10 月 19 日、20 日に東京国際フォーラムで開催された「全国自治体病院学会第 50 回記念大会」にて当院の業務企画室吉田綾子主事が発表した「岩手県立中央病院 地域医療支援部の東日本大震災における地域医療支援の状況」が優秀演題に推挙されました。その内容をご紹介します。

(目的)

東日本大震災津波における当院の地域医療支援の状況を提示すること。

(結論)

病院全職員の協力体制と院長が中心となつての情報収集・発信体制が不可欠になる。

これから、岩手県立中央病院 地域医療支援部の東日本大震災における地域医療支援の状況をご報告しますので、よろしくお願い致します。

当院の災害支援活動

- 1 被災地支援(医療チーム派遣)
 - i) DMAT の出動
 - ii) 高田、広田地区医療支援
 - iii) 宮古病院(救急医療)支援
 - iv) 薬剤師、放射線技師医療支援
 - v) 感染管理認定看護師(感染制御チーム)支援
- 2 高度・急性期医療の維持と後方支援
- 3 検死・検案医師派遣
- 4 全国自治体病院からの医療支援の窓口業務

当院は、岩手県の内陸部、県都盛岡市に位置し、県内 27 箇所の県立病院、地域診療センター等の県営医療機関の中核機関に位置づけられています。今回の大震災では当院は幸いにも大きな被害は免れ、被災地の沿岸病院への災害支援を行いました。まず当院の災害支援の全体概要ですが、3 月 11 日の東日本大震災の発生とともに、院長を中心に被災地への医療チーム派遣として DMAT の出動、高田、広田地区医療支援、宮古病院への救急医療支援、薬剤師・放射線技師の医療支援、感染管理認定看護師の支援、また 2 つ目として高度急性期医療の維持と後方支援、3 つ目として検死、検案医師派遣、4 つ目として全国自治体病院団体からの医療支援の窓口業務を行いました。

岩手県立中央病院

【行動指針】

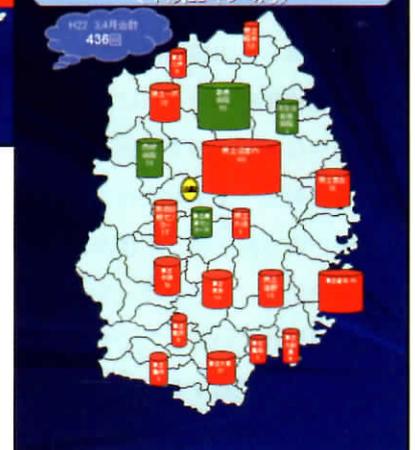
「4. 私たちは、本県医療の確保のため、地域医療機関への診療支援につとめます。」

地域医療支援部は、この災害支援活動の中の医師の派遣を主に担いましたが、まず平常時から行っている地域医療支援部の医師派遣についてご説明します。

当院は、岩手県の内陸部、県都盛岡市に位置し、県内 27 箇所の県立病院、地域診療センターなどの県営医療の中核機関に位置づけられています。

当院では病院の行動指針に「4. 私たちは本県医療の確保のため、地域医療機関への診療支援につとめます。」とさだめ、通常時から県立病院や市町村立病院への医師の派遣を行っており、平成 22 年度は 2,576 回の診療応援を行いました。

今回の津波震災では、沿岸の被災病院の支援として医師の派遣を行いました。

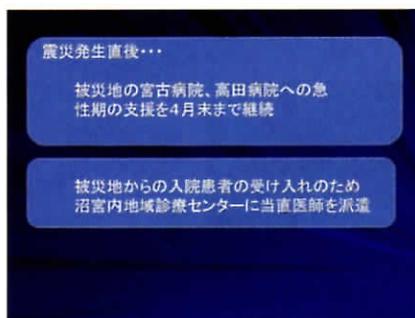
診療応援の病院別実施状況
(平成22年度)診療応援の病院別実施状況
(平成22年3-4月)

今年3月から4月の医師の派遣状況を前年と比較してみたいと思います。（なお、この図には、医師のみで看護師等の数字は入っていません。また DWAT や検死の数字も入っていません。）



この図の中で、当院は県中央部に黄色で表示しています。県立病院は赤色、市町村立病院は緑色にしています。

宮古病院は県沿岸部の中ほどに位置しています。宮古病院への診療応援数は、平成22年度が36回に対して、平成23年度は160回と約4倍の数になっています。また、高田病院は沿岸南部に位置しています。高田病院への診療応援数は、平成22年度は5回に対して平成23年度は136回と大幅に増加していることがわかります。



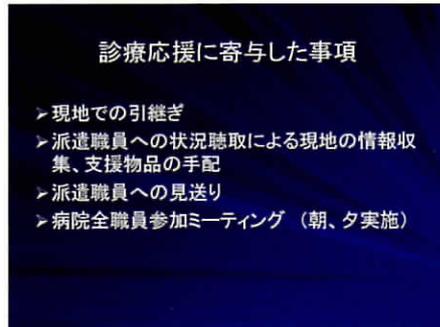
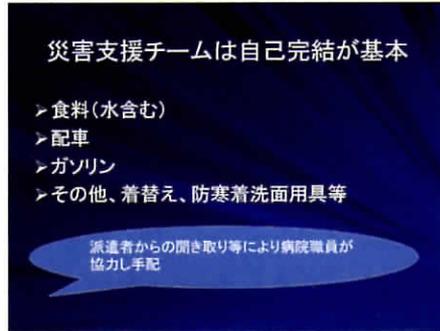
これは、震災の発生直後は、被災地の宮古病院、高田病院への急性期の支援を行うこととしたことをあらわしています。

また、この図ではちょっと分からないかとは思いますが、病院機能が壊滅した山田病院からの入院患者の受け入れのために、沼宮内地域診療センターに当直医師の派遣を行いました。

現在の沿岸病院への支援としましては、通常の診療応援に平行して宮古病院へ1ヶ月交代でシニアレジデント1名の派遣、釜石病院への当直応援、応援高田病院へ1ヶ月交代で2名ずつの研修医の派遣、などを行っています。

既に言われていることですが、支援側が支援に必要な物品を支援側が自己完結することが必要です。被災地の状況は随時変化していきますので、当院では順次戻ってくる派遣者からの聞

き取りにより、病院の職員が協力し手配をしました。



最後に診療応援に寄与したと考えられる事項をご報告します。支援チームは数日間の現地での業務の最後に交代のチームと現地での引継ぎをして戻ってくるというやり方でしたが、情報伝達がスムーズに出来良かったです。

また戻ってきた職員から現地の状況を聴取し現地の情報収集を行いました。

広田の診療所では地元の保健師の方々が自身が避難をしながら避難所の方々の介助をしており、とても疲れた様子だったこと、くすりの処方希望が主であり泥にまみれたぼろぼろの薬袋やお薬手帳を持参されることなど現地の医療の状況について職員が肌で感じてきた情報が報告されました。またこれに基づいて薬など支援物品の手配をしました。

また、支援チームが病院を出発する際は、院長以下の職員が見送りをしました。

通常の日常業務と平行して人員を派遣することは、院内の救急部、災害医療部、診療部、薬剤部、検査部、看護部、事務局など全職員の協力体制が不可欠でしたが、急性期において毎日、全職員参加のミーティングが行われたことは、全職員のモチベーションを上げ維持することに寄与したと考えられます。

今後につきましては、病院機能が壊滅した山田病院、大槌病院、高田病院の仮設診療所が7月までに完成しましたが、変化する現地の状況に合わせて支援を行っていききたいと思います。以上で発表を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

◆ふれあい看護体験◆

県立中央病院では、ナイチンゲールの誕生日に合わせた看護週間に、毎年「ふれあい看護体験」を行っています。今年も中学生、高校生を対象として実施しました。男子7名を含む、37名の参加があり、院長、看護部長の講和の後、緊張をほぐし(右の写真)、いざ看護体験へ出発。

患者さんとお話しをしたり、車椅子を押し散歩したり、足浴したり(表紙の写真)と1時間30分ほどでしたが、笑顔で体験できました。患者さんに喜んでもらい嬉しかった。コミュニケーションの大切さがわかった。看護は患者さんの一番身近にいて全力でサポートする仕事、患者さんの心に寄り添うことが患者さんにも看護師にも支えになることがわかった等の嬉しい感想も頂きました。

「病院はおもいやりであふれているなと思った」という言葉を大切に、それぞれの仕事をしていきたいですね。

(看護部：岡田千枝)



◆お知らせ◆

毎月、第三金曜日に新渡戸稲造記念メディカルカフェを開催しています。

メディカルカフェは、がん患者さん、ご家族と医療スタッフとの交流の場です。がんに関する様々な悩みや不安、普段聞きにくいことでも仲間や医療スタッフとお茶を飲みながら気軽にお話しできます。



事前の申込は不要で参加費も無料です。医療スタッフがおりますので、お気軽にご参加ください。毎月の日程、時間などは院内の掲示板のポスター、当院のホームページをご覧ください。

◆ 編集後記 ◆

病気に罹ると一気に日常生活が崩れ、肉体のみならず精神的なダメージを受けてしまいますが、スポーツ選手の怪我も活躍すればするほど怪我と紙一重の部分があるとつくづく思います。柔道の日本代表クラスの友人と話をしたことを思い出しますが、柔道はトップに行けばいくほど関節技が多用され、古賀選手などはもう両方の膝関節はガタガタだったと言っていました。大リーグの松井選手、松坂選手、サッカーの本田選手などはいかに怪我を克服して本来の動きを維持するための努力は並大抵ではないと思います。観客は結果しか見ないことがほとんどですから、自分の価値を認めてもらうためには満身創痍で努力するのでしょうか。病気にせよ怪我にせよ、医療という現場に立ち会っている私たちは、いかにして患者さんを健康に近い状態に近づけるかということに最大限の努力をするわけですが、病気を治すとい

うよりは、患者さん自身が持っている治癒能力を最大限に引き出す手助けをすると言った方が近いのかもしれませんが。場合によっては患者さんの生活の質を高めるために治療を中止する決断をしなければならない場合もあります。いずれにせよ、医療と患者との信頼関係をお互いに築いて往くことが重要で、そうすることによってよりよい医療の一助になるのではないかと思う今日の頃です。



中央病院広報委員会

◆委員長 島 岡 理

村上 晶彦	小笠原 秀俊
菊池 裕子	福田 耕二
後藤 由美子	佐々木 美奈
田沼 睦	盾石 有
大久保 忠吉	三好 佐由里
小原 鉄男	吉田 奈穂子

ふれあい No258 平成24年7月 発行



☑ 岩手県立中央病院

「ふれあい」はホームページでもご覧いただけます。

〒020-0066 岩手県盛岡市上田1-4-1

電話 019-653-1151 Fax 019-653-2528

http://www.pref.iwate.jp/hp9001/iph/chuohp/

R70

古紙パルプ配合率70%再生紙を使用